

歩きたくなるような都市

17B13251 藤本大輔

目次

1. 便利になる世の中
2. 都市における移動の利便性とその問題点
3. 具体的な提案
4. まとめ

1. 便利になる世の中

世の中は日に日に便利になっている。昔は分からぬことがあつたら本を読んだり人に聞いたりするしかなかったものが、今ではインターネットで調べればすぐに出てくる。毎回手紙を書いてやり取りをしていたものが、電話が発明され時間差なく直接声が聞けるようになり、さらにメールが発明され利便性も向上した。また、移動手段として徒歩しかなくどれだけ近い距離も遠い距離も歩いていたものが、車や電車といった移動手段が広まり時間の大変な短縮につながった。

これらの生活の変化は一見非常に良いものなのだが、マイナスの側面もある。いや、通常の感覚で考えれば良いことしかない。生活において面倒な作業や時間を大幅に省き、様々なことにおいて効率化を図ることができる。しかし、効率化とは必ずしも豊かな生活や幸せには繋がらないのではないだろうか。今ある技術がない時代でも人々は不自由なく過ごし、さらに言えば今の時代にはない豊かさがあったのではないだろうか。特別昔の方が良かったと言っているわけではない。効率化や利便性ばかり目指すのはどうなのかと言っているのだ。

このように私は便利になればなるほど失われる豊かさがあるのだと考える。これは都市における生活にも当てはまることがある。例えば先ほどの例でも少し述べたが、移動手段の問題だ。昔はどんなところにも歩いて向かっていたわけだが、今では車や電車ですぐに行くことができる。この変化も非常に便利なものだ。しかし、これによって失われたものもあるのではないかと思い、今回はこの問題に着目して話を進めたいと思う。

2. 都市における移動の利便性とその問題点

車や電車が発明されて、それを生活において利用することは何か問題のあることなのだろうか。そう問われると全く問題のないように思える。実際に時間の短縮化、つまり効率化や、徒歩で生じる運動量の削減などの利便性といった観点からすれば良いことしかない。しかし、その発明によって人々は歩くことが大幅に減ってしまったことは事実である。

移動において、歩くという行為は必ずしも悪い事だけではない。歩くことによって足腰が

鍛えられ、丈夫な体を作ることができるだろう。健康という観点においてこれは大事なことである。さらに、これが今回言いたいことなのだが、歩くことによって初めて周りの環境を視覚や聴覚によって感じることができる。また、時には立ち止まり、何かを眺めたり、写真を撮ったり、人と話をしたりすることができる。これは生活における豊かさという観点から見た、歩くという行為の利点の一つである。これらのこととは車や電車に乗っていてはすることができない。速度が速いので周囲の様子を観察することもできないし、いずれも基本箱のような閉ざされた空間であり、音を感じることもできない。徒歩のように簡単にどこででも止まり、自然や人と交流することもできないだろう。

このように、移動手段として徒歩を使うことによって日常における些細な豊かさの恩恵を受けることができる。しかし、今日では先述している通り、車や電車の利用が多いのが現状だ。なにも、歩いたら数時間もかかる遠方までの移動も徒歩の方が良いと言っているわけではない。近所のスーパーやコンビニに車で行く場合や、一つ隣の駅に電車で行く場合など、比較的短い移動さえも車や電車を利用することが問題だと言っているのだ。確かにその方が効率的だし便利かもしれないが、それによって豊かさを失ってしまう。さらに言えば、地球環境的にもよくない。私はこのように、少なくとも短い距離の移動には徒歩を使用すべきだと思っている。

しかし、そうとは言ってもやはり車や電車を人々は利用してしまう。これは、移動するときの道に生活における豊かさなどといった魅力を見出せないからだ。数分歩くだけなら道に魅力がある必要もあまりない。しかし、數十分後歩くとなるとなにも魅力のない道ではつまらないし、なにも得るものがない。このことから、私は普段使用する道や街並みを歩いていて楽しいような魅力あるものにすべきだと考える。いや、車や電車がなかった時代にはあったかもしれない道の魅力や豊かさを取り戻すという表現でも良いかもしれない。いずれにせよこれが今回の話を解決するものになると思う。次の節ではこの具体的な提案を述べようと思う。

3. 具体的な提案

つい歩いてしまいたくなるような、歩いていて楽しい道や街をつくる方法はいくつかあるだろう。しかも一つの方法だけではこれは実現できないことである。あらゆる視点から見て、様々な手段を用いてこのような道や街を作り上げていくのである。

下に考えうる限りの方法を箇条書きにて並べてみる。

「歩道のない道路に歩道を作る。また、歩道の幅を広くする。」

車が通っている道路の端、つまり路側帯ではやはりあまり歩く気にはなれないだろう。きちんとした歩道ができるだけ作るべきである。また、既に歩道がある場合でも、快適に歩けないような幅のものも多くある。そのようなものもできるだけ広くすべきである。

「歩車分離のされた道路や街づくりにする。」

一つ前の提案のように歩道を作るのも良いが、それ以上に歩行者専用道路をつくるとさらに効果的である。歩車分離することによって車が側を通っている不快感をなくすことができる。また、何より脇に車道がないことによって空間的な制限が緩くなり、魅力的な空間に包まれるような道にできる。他にも、歩行者のみのネットワークを作ることができ、歩いていて魅力的な道や街にするための計画をしやすいなどといった利点がある。

「良い意味で同じような景観が続く、統一感のある道をつくる。」

ヨーロッパにあるようなレンガや石を積んで作られた建築が並ぶ通りや、日本の各地にある江戸時代に戻ったかのような景観の建築が並ぶ通りなど、統一感のある通りは景観的にとても美しい。ここまでのこととは普段住んでいる街の通りではできないかもしれないが、ある程度特徴のある見た目の綺麗な建築を統一感を持って通りに並べることにより、同じようなことができるのではと思う。伝統的な建築や通りでなくても、統一感を持たせれば景観的に良いものとなり、つい歩いてみたいと思うはずだ。

「人の多い活気のある街、人との交流のある街とする。」

やはり自分1人ではなく、多くの人が街で歩いている方が活気があり徒歩で移動したくなる。同じような年代の人だけでなく、様々な年代の人がいたら尚良い。また、近所の人と広く交流してると周りに知り合いが増え、歩いているときに挨拶や話をすることができるかもしれない。そのために近所の人が集まり交流する場や制度を作ることも良いし、自然に交流ができるように住宅の形や配置を工夫して近所で一体感を持たせるのも良いかもしれない。

「目的地までいくつかの道があるような街のつくり」

普段私たちは自宅から駅やスーパーまでなど、毎日同じ道を通っている。しかしそれではやはり毎日同じ風景で飽きてしまい、結局は効率化や時間の短縮化を求めて車などを使ってしまう。そうならないよう、目的地までいくつかルートの選択肢があるような街のつくりが重要であると思う。今でもいくつか道があるように思えるが、最短経路はほぼ一つに限られるはずだ。そうなると毎回その一つの最短経路を選ぶことになるだろう。最短経路となるような道をたくさん作り、昨日はあっちの道から行ったから今日はこっちの道から行こう、などとなれば良いと思う。

「自然や緑あふれる道や街。また、季節や時間によってその自然が姿を変える道」

今も歩道の脇に緑や木々がある道は多くあるが、やはり緑のない道に比べると歩いていて気分がいいものだ。緑が全くなく人工物にのみ囲まれた道は殺風景で居心地が良くない。歩

道の脇には緑があるべきだと思うし、すでに緑のある道路もさらに緑を増やし、かつ綺麗な魅せ方も意識すべきである。また、1つ前の提案でも述べたが、毎日同じような道だと飽きてしまう。前の提案の通り、道自体を増やすのも有効ではあるがそれだけでは限界があるだろう。そのため、一つの道の姿を、季節や時間によって工夫して変えるのが良いと思う。四季折々の草花を道路の脇に植えたり、アサガオなどの時間によって姿の変化する植物を植えたりすると良い。秋が近づいてきて、ここの道は金木犀の香りがしてきたな、あっちの道ではコスモスが咲いているかな、などとなれば移動としてでも外を歩くのが楽しくなるだろう。

「住民が参加し、道や街並みに変化を与えるようなシステム」

道や街を魅力あるものにするために、全てを自治体や他の団体に任せていってはつまらないと思う。そこで、住民が直接街の景観を作るようなシステムがあると良い。例えば住民一人一人が家の前庭などをガーデニングしたら道を通る人は様々な庭が見て楽しいであろう。時期によってはイルミネーションで飾るのもよいかもしれない。また、これらのことの促進するための大会やお祭りなどと行ったシステムが必要である。優秀な家には何か賞を与えるなどしたら街の中でガーデニングやイルミネーションが盛んになると思うし、つい移動の際でも外で歩きたくなるはずだ。

4. まとめ

私は前節でこんな道がいい、こんな街になれば良い、とあれこれ考え雑多に様々な観点から提案を述べてきた。それゆえに、これらの提案は現実では既存の街の作りや制度、予算の観点で難しいものがほとんどである。しかしこんな道があれば誰だって、少なくとも私は通りたいと思うし、このような街に住んでみたい。世界のどこかにこんな街があればいつか行ってみたいと思う。自分の住んでいる街もこのような街にいつか近づいて欲しいと切に願う。